

氏 名 : 神野 雄二  
専攻分野の名称 : 博士 (学術)  
学位記番号 : 博乙第109号  
学位授与年月日 : 令和3年3月16日  
学位授与の要件 : 学位規則第4条第2項該当 論文博士  
学位論文名 : 山田寒山・正平を中心とする篆刻家の実証的・総合的研究  
論文審査委員 : (主査) 教授 加藤 泰弘  
(副査) 教授 樋口 咲子 教授 青山 浩之  
教授 尾関 幸 准教授 宮戸 美樹

## 学位論文要旨

本研究は、日本の篆刻家である近現代を代表する山田寒山（1856～1918）・正平（1899～1962）父子を取り上げ、実証的・総合的研究を行うものである。総合的とは、篆刻家としての業績のみならず、詩・書・画、また教育者としての業績など、より幅広い観点から研究を進めたことによる。

山田寒山・正平父子を中心としているが、寒山と正平の人と芸術を論じる上において重要と思われる、彼らに関わる篆刻の専門家と、篆刻に関わる文人・芸術家の篆刻と篆刻論に関しても言及した。

また、確かに山田正平は、芸術家であるが、教育面に関して大いに功績がある。東京学芸大学における「篆書・篆刻」講義は、正平の研究において重要である。正平が当時行った教育は、教育の本質に関わるもので、今後の教育の在り方、芸術科書道の教員養成における篆刻教育を遠望する上で、大きな示唆を与えてくれており有用である。

篆刻は、歴史、文化、芸術の一翼を担っており、篆刻家が日中の書道史において果たした役割は少なくない。書学書道史や書道教育を語る上で、篆刻や篆刻家の存在と功績は欠かせないものである。中国に比し十分とは言えない本邦の篆刻家の研究は、大いに意義あるものとする。つまり、従前は研究が入念になされてきたとは言えなかった、日本の近現代篆刻に視点を当て、その篆刻と篆刻家を広い観点から考究し、これまでにない体系化を図ったものである。

本研究は、序論、本論の第1～第7章、結論、附章で構成されており、以下の章・節に分ち論じたが、その概要は以下の通りである。

序論では、本研究の主題、第1節 目的と意義、第2節 方法と構成に関して示した。

本論は以下の通りである。

第1章では、山田寒山と山田正平の篆刻における、その美と表現に関して、以下の節に分け、実証的・総合的研究を行った。寒山・正平の篆刻における美や表現に関しては、これまでいくらか指摘されているところではあるが、実証的・総合的に論及されたものは見られない。

本章では、具体例に添って、彼らの篆刻の美しさはどこに存在するのかに関して、作品分析を行った。また先人からどういった影響を受け、それを後世にどのように伝えたか言及した。さらに、作風の変遷に関して触れた。第1節 山田寒山・正平における篆刻の美と表現に関する研究（Ⅰ）、第2節 山田寒山・正平における篆刻の美と表現に関する研究（Ⅱ）である。

第2章では、山田寒山研究として、以下の節に分け、実証的・総合的研究を行った。第1節 篆刻について、第2節 印学と『印章備正』、第3節『寒山新聞』に見える寒山の事績と業績、第4節 山田寒山年譜考である。

第3章では、山田正平研究として、以下の節に分け、実証的・総合的研究を行った。正平に関する山田家に遺された数多くの資料・文献を博搜、関係者へのインタビュー等を通して、正平の詳細な年譜と系図を編み、その事績と芸術に関して論じた。第1節 篆刻について、第2節 詩について、第3節 書と書論について、第4節 画と画論について、第5節 用具・用材について、第6節 実父木村竹香について、第7節 山田正平周辺の人々とその交友（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）、第8節 山田正平年譜考 附一山田家系図一である。

第4章では、山田正平における教育者の面からの研究を、以下の節に分け、実証的・総合的研究を行った。東京学芸大学における講義に関して『篆刻講義ノート』の精査、また当時受講した学生へのアンケート調査の分析や周辺資料を提示し、正平の教育者としての功績に焦点を当てた。正平は、芸術家・学者・教育者として、実に多面的な顔を持っていたといえる。第1節 山田正平における東京学芸大学での「篆書・篆刻」の講義に関する一考察（Ⅰ）、第2節 山田正平における東京学芸大学での「篆書・篆刻」の講義に関する一考察（Ⅱ）である。

第5章では、山田寒山と山田正平に関わる篆刻の専門家と、文人・芸術家の篆刻と篆刻論に関して、以下の節に分け、実証的・総合的研究を行った。わが国の印人伝における嚆矢と言える中井敬所の『日本印人伝』をさまざまな資料・文献より拾遺し補訂することは重要な研究といえるが、篆刻の専門家はもちろん、篆刻に関わる傍系の文人・芸術家の研究の意義は小さくない。本章は、寒山と正平の人と芸術を論じる上において重要と思われる。第1節 小曾根乾堂の篆刻と篆刻論、第2節 富岡鉄斎の篆刻と篆刻論、第3節 会津八一の篆刻と篆刻論、第4節 中川一政の篆刻と篆刻論、第5節 西川寧の篆刻と篆刻論、第6節 保多孝三の篆刻と篆刻論である。

第6章では、日本の印聖と称される高芙蓉の研究を、以下の節に分け、実証的・総合的研究を行った。第1節 高芙蓉の顕彰と墓碑について、第2節 中井敬所の高芙蓉研究である。

第7章では、中国・日本の印史とその特色に関して論じた。本章は本研究の基礎的研究といえる章である。中国と日本に分け、各々の印章史および篆刻史を概観し、その特色に関して考察した。また本研究を進めるために必要な資料・文献、印譜や図録類、先学の研究業績を述べた。

結論では、本研究の成果とその意義に関して論じた。また本研究に残された課題と展望について明らかにした。

附章では、山田寒山・正平に関わる研究資料として、以下の節に分け提示した。第1節 明治・大正期新聞資料における山田寒山関連記事見出し一覧稿、第2節 園田湖城宛富岡鉄斎書簡

翻刻並びにインタビュー「富岡鉄斎を語る①中田勇次郎・②小高根太郎」、第3節 桜井定市宛  
山田正平書簡翻刻、第4節 山田家蔵画日記翻刻三種である。

最後に、初出一覧と引用・参考文献一覧を附した。